

改めて筆を執らんとする題目は凡そ以上の如きものである。

蘇曼殊に關して

馮 亞 健

譯者のまへ書

舊東北軍閥張學良は、一時武漢に來り今日の曙莊のある建物に假寓した。學良が漢口に來ると彼の關係者も亦た續々として漢口に這入り來つたので、東北軍方面の言論機關が必要となり、當時大新聞として武漢日報、掃蕩報、新聞報、大同日報等がある中に割込んで「大光報」なる朝刊八頁の大新聞を發行した。此の東北系の機關紙にはおのづから記者も東北系のものが集り、その中に某といふ若い記者があつた。昭和九年冬頃だつたと思ふがその若い記者が邦人四人とある邦人宅に落會ひ、雜談するうち、某は日本人たる我々に對しお世辭のつもりであつたのであらう「私は民國六年頃上海で蘇曼殊上人と會つたことがある」と云つたところがその中の三人は勉強したものが煙違ひであつたので、蘇曼殊とは始めて聞く名であつた。それで折角の若い記者が持ち出した話題も一向に彈むところまで進まずに消滅したのであつた。私はその少し前に、中國文藝評論などを讀んでゐる

うちに「蘇曼殊型神童出でよ」などいふ文句にふつつかり、また自身寄稿してゐた極めて限られた讀者しかない雜誌に「鐮倉に於ける蘇曼殊」なる一文を見出だして讀んだ。讀んだ爲めに、上海で出版された箱入り四冊全巻となつた「蘇曼殊全集」なるものを讀んで見たりしたことがあつた。而してこの不思議な日本人にして又中國人である一文化人曼殊大師に就いて知り得たものは次の如き輪廓であつた。即ち蘇曼殊は日本人であつて中國人に育てられた。その祖父は忠郎、父は宗郎、母は河合仙、而して曼殊自身は幼名を宗之助と稱し、三郎とも言つてゐた。江戸の名族の子で、早く父を失ひ、嬰兒を抱いて路頭に迷つたお仙はその父の恩顧をうけた中國商人蘇某に拾はれ曼殊はその數奇な生涯に這入つた。又別の話として、曼殊に關するたつた一つの日本語で書かれた資料として存在する河合仙が書いたといふ曼殊書譜序には吾が兒とあり、又祖父母と撮つたといふ寫眞も残つてゐるがその祖父は紋付姿、祖母も日本婦人で、その間に四五歳の曼殊がチヨコナンと控へてゐると言はれてゐる。

だが蘇曼殊全集にある作品や年譜を見ると必ずしも純粹の日本人であつたとのみ解することの出来ない部分もある。本文の中にある柳亞子が昭和七年蘇曼殊傳略を草し雜誌で發表したものによると日本人河合三郎は日支の混血兒蘇玄瑛でありお仙の實子でなく、廣東省香山縣滙溪鄉人蘇傑生の子として明治十七年舊曆八月十日横濱に生れたのである、原名は蘇戩、字は子穀、後に改名して玄瑛となつた。父傑生は當時横濱山下町に住み、萬隆茶行の貿易仲買人で、一妻三妾がありその第一妾がお仙であり、別に一人の下女があつたが、傑生はその下女に一子を産ましめ、産後三ヶ月足らずで下女は出奔したので、傑生はその嬰兒をお仙に養育せしめた。お仙と傑生の間には曼殊よりも九歳程年長の照亭といふ子があるが照亭は曼殊が同腹の兒であることを主張してゐるが、彼は父傑生が下女と通じたといふことを隠すためにさういふのであらうと柳亞子は見えてゐるのである。

何にしても純日本人か混血兒か判然としないが、それよりも最初に書いたよう曼殊上人はあまり邦人間には廣くは知られてゐないことが分る、それで前號本誌上で標題の如き一文が發表されてゐたからこゝに翻譯したのである。尙ほ曼殊上人作「斷鴻零雁記」は邦譯されて改題社から昭和十三年に出版されてゐる（鄂渚浪人）

（一）

曼殊の在世中と家族に關しては澤山の異つた記載がある。柳亞子の考證に據れば、中華民國紀元前二十八年

甲申、西歷一八八四年）日本江戸において生れた。日本名は宗之助であり、字は三郎、祖父の名は忠郎、父の名は宗郎、姓氏は詳かでない。母親は本姓河合氏であり、曼殊を生んだ數ヶ月後に彼を生んだ父はすなはち死んだのである。適ま廣東省香山縣蘇某なるものがあつて、江戸において商賣をしてゐたが、河合氏を娶り連子の子の曼殊を子と爲したのであつた。五歳になつたとき、彼の養父が廣東に返るに隨ひその香山の郷里に到り姓を蘇、名を玄瑛と改め、字を子穀と言つた。（後に到り名字は甚だ多く曼殊は彼れが出家した後の法號である、章太炎の曼殊遺書弁言によれば「亡友蘇元瑛子穀……父は廣州の産、日本に商し、日本女を娶り、而して子穀を得」である。これは是れ曼殊が彼の母親が改嫁したものであるといふに恐びず掩飾したところの遁詞である。其實彼は完全に日本の血統で、両親はすべて日本人であり、蘇某は乃ち彼の「養父」である。

彼の養父は、本來國內において早くより妻子があつた。だから異國人の曼殊母子は、當然蘇氏の家庭に容れることの出来ない事情にあつたので、三年後（曼殊八歳の時）河合氏は日本に歸つた。曼殊もまた養父より香港に送られ西班牙人羅弼氏莊湘處士について語學を勉強した、彼の天性伶俐なことは常人に勝るものがあつたので莊湘夫婦は非常可愛がつたのである。香港にあること二年、彼の養父は死亡した。そこで學をやめて家に歸ると養母と蘇家の人達は曼殊を斥けて他國人とし非常に虐待を加へた、甚だしきに至つては河合氏が日本より送り

来る信書も金銭も没收して、河合氏は既に海中に溺死してしまつたと言つて聞かしたりした。是に於てか曼殊は生存の方法なき環境下において遂に廣東長壽寺に於て剃髮出家し法名は博經、曼殊と號したのである。これは彼の十二歳のときである。久しからずして又雷峰の海雲寺に到り三壇大戒を受けたのであつた。すなはち斯くして彼の一生の幸福と事業（佛門にあるもまた事業かも知れないが）はすべて失はれたのであつた。十三歳の時托鉢して廻つてゐると、幼少のときの乳母に遇ひ、その時始めて實際の母が日本に在ることゝその住所を知つたのであつた。是に於て彼は日本に渡り母親が神奈川に居住するに依り出家せる事情を隠し、母の命を奉じて上野學校に二年間西洋美術を學び、早稻田大學に政治を三年學んだ。後に結婚問題が起るに及んで破戒返俗することが出来ず終にまた廣東に返つた。彼はこの僅かな五年の間に於て天倫の樂趣をうる事ができた。これは彼が一生轉軻旅途中に於ける享受するところの人生の恩恵といふことが出来るであらう。

廣東に於いて彼は虎山法雲寺にあること一年、再び師の許を辭して日本に到つた。時の清國公使王大燮は彼の才を愛して、官費を以て彼を助け成城學校に於て陸軍を習ひ、名を改めて蘇湜と呼んだ。一年に及ばずして日露戰爭起り、便ち名を「軍國民教育會」につらね、義勇軍に編入した。是に於て聲名大噪したが、たゞ彼の志は此處にあらず、又中國に返り長沙實業學堂に主講し後また蘇州に到り吳公中學教授に任じた。久しからずして上

海に赴き、章士釗陳獨秀等と共に國民日日報の翻譯に携はり、佛人の名著「レミゼラブル」を譯し紙上に連載した。これは後に「孤星淚」となつてゐるが其時は「慘たき社會」（日本では噫無情）と曰つた。後に新聞社は閉鎖されたので香港に赴き莊湘に遇つた。莊湘はその娘雪鴻を與へて彼の妻とせんとしたが、彼はこの時泣いて、自分は僧籍に在つたものであるから結婚することは出来ないと言つて斷つた。莊湘は彼を助けて盤谷に赴かしめ梵學を研究せしめると共に南洋各島を遊歴せしめた。二年後國に返り南京陸軍小學に教鞭を執り二年後更に蕪湖長沙に於いて書を教へ、二十四歳のとき三度び日本に渡り劉師培等と同遊したがこの間に彼の偉大なる傑作「梵文典」八卷を著した。翌年秋再び南京に回つて祇垣精舍に主講し年末又日本に渡り母に隨つて逗子櫻山に住し病を養つた。バイロンの詩の譯はこの時に成つた。己酉（明治四十二年）八月（二十六歳）再び上海に到り結社關係から新嘉坡に走る船中に於いて莊湘と雪鴻とに遇つた雪鴻はバイロン集一卷、寫眞、花束等を贈つた。翌年轉じて印度に赴き約一年住まい再び日本に回つた。此後七八年の間は中日及び南洋各地の間を往來してゐたが翻譯著述甚だ多かつた。曾て上海太平洋報社主筆及び各地の主講に任じ、民國六年に到り日本に於いて病を養ひ後上海に來り秋になつて病は劇しくなつたので蔣介石陳果夫等と新民里十一號に同居した。冬になつて始めて海寧醫院に入院した。翌民國七年春、再び金神父路の廣慈醫院に移つたが陰曆三月二十二日（五月二日）病歿した。時

に年僅かに三十五歳であつた。一代の大師は斯くの如くにして圓寂した。死せる時彼の母河合氏は尙健在し、葬式に就いては我等の汪主席が代つて執行し西子湖畔に葬つた。

曼殊は佛門に這入つたので結婚は出来なかつたが然し豔福は頗る多かつた。雪鴻の外彼の母も彼のために妻たるべき女の世話をしたことがあり、彼の養父も亦會て彼のために雪梅といふ女を以て妻たらしめんとした。後になつて女の家と曼殊とは絶たれたが雪梅は彼のために一生を捧げて死んで行つた。曼殊の身世は實に悲しむべきであつた。

神は何故にこんなに人を播弄せねばならぬのか、古今中外傑出した天才はすべて蹇蹇不遇、一生零落し一としてその公例を逃出することが出来ないのである。我國の天才詩人李白、杜甫、泰西の天才詩人バイロンから小泉八雲に至るまで之等の人達はすべて才に豊かにして不遇でありどんなに讀者に熱涙を絞らしめたかを知らない。なかんづく我等のこの偉大なる天才家曼殊大師は、彼の「落葉哀蟬」泣く可く歌ふべき悲痛の身世であり、更にその中の尤なるものであつた。

彼の出生は小泉八雲の出生と頗る似たものがある。

小泉の父親は愛爾蘭人であり母親は希臘人であつた。生れ落ちると直ぐ彼は兩親の許を離れたので、彼の誕生日は確定することが出来なかつた、彼は曼殊に比べると略は一籌を勝つてゐる。小泉は幼兒時代ただ彼を愛せざる老嫗によつて撫養された。曼殊は則ち竟に仇敵のごとき

保護者を求めてもすべてなかつた。小泉は會て街上の籍の中に長夜を過せしホテルのボーイとなつた。曼殊も亦た會て託鉢となり、籃を提げた花賣りとなり、山に入つては柴かりとなつた。この二人の生活と境遇は真に一轍に出づるものといふことが出来る。なかんづく曼殊はその母親が異國人に改嫁した爲めに眞の姓氏は一個の謎たらしめた。ゆゑに彼は會て再三沈痛に我身の上は言ひ難き悲しみありと言つたものであつた。假に彼をして一個圓滿な家庭に誕生せしめたなら彼又何ぞ沙門に遁入して彼の對社會的貢獻を減少せしめようか、のみならず時代もまた正に國事に喧しき秋、多情工愁の曼殊大師が、遭家不造、しかも時艱に蒿目し家國辛酸の涙をどうして免れ得ることが出来やうが、我等はたゞ彼が一生の勞碌奔波三十餘年、はこんど日として窮愁流浪中に過さざるはなく、彼の母に依つて短期間の團聚を得た以外たゞの一日も嘗て家庭生活を過せしめたことのないことを知らねはならぬ、これは彼の李杜の遭遇と比べて更に萬倍する悲哀事であつた。今日に於て我等はこの薄命の天才家を追懷し來り、眞に無限の同情と失望の感をふかくするものである。

(二)

曼殊大師が一生の境涯は眞に落葉哀蟬の姿といふべきであらう。ゆゑに當然彼の作品と思想は、また以て契機となり而して最大の影響を與へたのであつた。彼は確に一位の偉大なる天才家であつた。彼の聰穎は以て空前

絶後で一個人の能く彼に企及し能はざるところだといふことが出来る。彼は僅々四歳のときすなはち能く「地に伏して帥を乞ふが頻りに伸び、状は翹々として活きんと欲す」である。九歳にして西班牙人の牧師に従ひ、香港において歐洲の語學を學んだ、ゆゑに牧師莊湘夫妻は彼を痛愛した。十二歳のとき、すなはち出家して三増大戒を受け南樓古刹の知識に任じ彼の梵字學研究の生涯が始まつた。それより後日本の上野美術學校と早稻田大學に於て授業をうけること前後五年、その成績は卓絶せるものがあつた。この外また陸軍に關して學ぶこと八ヶ月、これが彼の一生の學歴とするのである。二十歳のときすなはち吳中公學教授と上海の國民日報の翻譯に任じた。この後盤谷に於て喬悉磨長老に従つて梵字を學ぶ事二年の外直ちに此世を去ることになつた。大半の時期はすべてこれ畫筆の生涯である。揚性恂の「錦笈珠囊筆記」によれば「……文詞は立派で、繪はたくみであつたが、然かも常に筆を執らず、或は畫き竟つてすなはち之れを焚く……」と、其の實彼の特長は、また梵文、梵學、英文學から詩詞日本語に及んでをり、たゞに文詞が立派で繪が上手なばかりではなかつた。ゆゑに我等は彼を呼ぶに天才家と爲す以外呼びようがないのである。詩人、作家、藝術家、何と呼んでも愧づるところなきものである彼の詩は真切滂薄、情は詞に溢れ、斷鴻零雁記中に「バイロンは猶中華の李白の如く天才也」といひ、又、本事詩第三首に「丹頓、拜輪はこれ我が師」といふ句があるこれは彼が平生傾倒するものに中華に於てはたゞ李白あり、

西歐においてはたゞダンテ、バイロンの兩人ありしを示すものである。およそ彼は自ら憐み人を憐むで李とバイロン二人の悲痛な身の上に同情したものであらう。彼はまた同時に言つてゐる。「セークスピアは猶は中華に於ける杜甫の如く仙才である……」チャーリーは猶は中華に於ける、李賀の如く鬼才である」と、これは彼れが詩品の高遠なるを知る可きである。彼は曾て日本に渡る船中に於て、一氣にバイロンの「大海」六章を漢文に翻譯した。その雄渾奇偉、その眞を失はず、譯文は更にこれ天衣無縫である、この時彼は十三歳であつた。是れ絶大な天賦にあらざれば出来ないことで、眞に人をして相信せざらしむるところのものである。所謂「李白は斗酒詩百篇」も恐らくはまたこの種の境界でないであらう。

曼殊は宋人の理學を蔑視したようである。ゆゑに陸放翁と陶淵明の詩や、莊老の學說を談じたことは甚だ少い、則ち曾ていふには彼の畫は板橋と甚だ接近し理趣を重んじ滄茫古逸、翛然凡ならずと。しかし彼は滅多に筆を執らなかつた。友人のところで一二畫く位のもので、之れを賣るやうのこともなかつたので今日残るところのものは甚だ少いのである。彼の斷鴻零雁記中に、中日文化溝通に關する史實を記した一段がある「朱公（即ち明遺臣朱舜水）は崇禎十七年、即ち日本の正保元年、正に湖人猖披の際より子然としてしげく長崎に航し、秦庭七日の哭を爲さんと欲し、竟に其の志を果さず、萬治三年に及び而かも明社を覆つたのである。朱公は亡國の遺民なるを以て二朝の粟を食むを恥ち遂に長崎に流寓した

其の地は平戸の鄭成功が誕生せる處に近いのである。後徳川氏は之を聞いて水戸の儒臣を遣はし聘して賓師としあまねく禮遇したのであつた。公は遂に王陽明學を吾土に傳へた公と陽明は固より同郷である。今日に至るも朱公の遺墓は尙は茨城縣久慈郡瑞龍山に存す……又聞く公はひどく櫻花を愛し、今江戸小石川後樂園中に猶ほ朱公の遺愛を留む、此の園は朱公が親しく經營せるものである。朱公は天和二年の春を以て逝世した。享壽八十有三公は清人を目すること仇の如きものがあつた。平日日本語を操つること至つて精しく、然して易簣の際に當つて公の言ふところは悉く漢語を用ゐた、故にその臨終の垂訓を聞くことが出来るものなく、亦た大に哀しむべきところならず耶」と、(我等はたゞ日本がつとめて陽明の知行合一の説を得たるを知る、しかも我等はその然る所以を知らない、此の如くいふところ、或はさうであらう)されば曼殊が朱公に同情したるを見るべきである。柳亞子は「蘇曼殊我觀」の一文中に曾て言つた。「すなはち曼殊の思想説は、若したゞ彼の外貌を看れば政治的社會的問題に對してすべて淡薄であり、其實彼は非常に熱烈であつたようである、表面に於ては看出すことが出来なかつたのであらう」と誠に然り、曼殊は國民日日報上に發表した「噫、無情」や彼と革命黨人と同遊した如きは確に一個の革命行動者である。彼はジャバに於て中華光復の消息を聞いて、立どころに書を滬上の柳亞子馬君武に寄せたがその中に次の如き句がある。「ちかぢろ大漢の天聲を振ふ、想ふに兩公はすべて劍影光中にお

いて拍手して談ず、遠く異國にて適るは慧ならず、たゞ左右に神の馳するあるのみ」と、また「壯士刀を横へて革轍を看る、美人瑟を挾んで詩を題することを請ふ。遙かに知る公等此時の樂」と、見るべし彼の興會と愛國の熱情のバイロンに滅せざるを、故に彼は詩人、畫家、文學家、小説家、翻譯家たるの外、また一個の革命家であらねばならぬ。若くして新文壇上に於て、彼は瑰奇的天才を發揮しつゝ人を警むるの曉鐘となした、我等もまた彼が我等に影響を與へたこと忽視することは出来ない。現在彼の著述は僅かに篇目の考ふべきものが約二十種である。梵文典八卷、梵書摩多體文、沙昆多選、法顯佛國記惠生使西域記地名今釋及旅程圖、泰西羣芳名義集、泰西羣芳譜、埃及古教考、粵英辭典、無題詩三百首、人鬼記、英譯燕子箋、曼殊畫譜、女子髮髻面圖等、完全に流行するものには、嶺南幽光錄、燕子齋隨筆、悲慘世界焚燬羅海濱遊跡記、斷鴻零雁記、天涯紅淚記、絳紗記、燕劍記、碎簪記、非夢記、文學因緣、拜輪詩選、潮音、漢英三昧集十餘種があり、他人の掇拾せるものも散見するがそれらには蔡哲夫輯、曼殊上人妙墨冊子、王德鍾輯燕子齋遺詩、馮秋雪輯燕子齋詩、沈尹默輯曼殊上人詩稿、周瘦鵲輯燕子齋殘稿、段菴旋輯燕子山僧集、盧冀野輯曼殊說集、光華書局輯曼殊小說集、柳無忌輯曼殊逸著兩種蘇曼殊詩集、蘇曼殊全集等十餘種がある(以下次號)